

## 特別企画「バイオ系の海外就職指南」

### 特別企画によせて

新城 雅子

『生物工学会誌』では2014年6月から「バイオ系のキャリアデザイン」というシリーズを開始し、現在まで5年にわたり連載しています。毎号、企業やアカデミアの若手から中堅、シニアまで幅広い年代、ご専門領域、職種の方からご寄稿いただき、生きたバイオ系のキャリアパス紹介サイトとして、愛読いただいています。本シリーズの立ち上げを任せていただいた私（奈良先端科学技術大学院大学でキャリア支援担当）は、5年間余りで国内外の産学官ご所属の150名以上の方にご寄稿をお願いしてきました。それぞれご多忙の中、後進のキャリア選択の参考になればとご執筆いただいた積み重ねにより、本シリーズはバイオ系キャリアの指南書的な存在になって参りました。

今年度は、本シリーズとして初めて「キャリアデザイン特別企画」を2つ企画しました。第一弾は、97巻11号掲載の「ラボ立ち上げました」<sup>1)</sup>です。本特別企画に合わせ、今年、ラボを立ち上げられた摂南大学講師の大橋貴生先生からラボ立ち上げに関する質問状を頂きました。それへの回答を含め、ラボ立ち上げ経験を有する6名のアカデミア独立研究者（PI）の先生方にご寄稿をお願いしました。11号をどうぞご覧ください。

特別企画第二弾は、本編「バイオ系の海外就職指南」です。「バイオ系のキャリアデザイン」シリーズに今までご寄稿いただいた中で、海外でポスドクを経験された方は、香川大学の吉田裕美さん<sup>2)</sup>、北海道大学の田中厚子さん<sup>3)</sup>など数名おられます。しかし、海外ポスドク後、現地企業研究者就職の道を選んだ方は大変少ない中で見事に達成されたのが、ご執筆当時DuPont Pioneerの泉美知さん<sup>4)</sup>です。また、日本での企業研究員から海外に出て、英国で技術員からPhDコース、ポスドクを経てアカデミアで教授に就任された高野恵理子さん<sup>5)</sup>など海外でしなやかに逞しく道を切り拓かれてきた方の貴重な経験もご寄稿いただきました。私自身は、日本で外資系製薬企業の研究所で勤務していた折、青天の霹靂だった企業の合併に対応する選択肢の一つとして、本社のあるスイスでの現地採用研究者の道を選び、日本を出ました。日本勤務時には想定外の海外勤務の機会を得たのでした<sup>6)</sup>。

昨今、大学でキャリア支援に携わっていると、グローバルリーダーを育成するという大目標に向き合うこととなります。海外でポスドク経験後、海外で就職する壁はまだまだ高いという現実から、多様なケースでの海外就職の実例を読者に伝えたいと考えていました。

そんな折、本特集のトップバッターを務めていただく荒川力氏・大竹聡敏氏が私と同じ思いで、「米国バイオ企業でのキャリア」というお二人連名の原稿を届けてくださいました。

また、海外の企業で活躍する日本人3名に昨年からお寄稿をお願いしていました。一人目は、スイスの現地製薬企業でポスドク勤務後、そのままスイスのバイオインフォマティクスの企業に就職された近藤俊哉さんです。二人目は、日本で就職して数年し、アメリカでの研究を目指し渡米し、多大な努力を要した就職活動の末、DuPont Pioneerに就職された木瀬理恵さんです。本企画が最終的に固まる前にご寄稿いただいた米国ベイエリアの大学でPIを務められた友田慎一郎さんの原稿は、通常のバイオ系のキャリアデザイン（97巻7号）<sup>7)</sup>に掲載しました。

本特別企画では、上述の4名のご寄稿文に私個人のスイスでの就職経験も加え、「バイオ系の海外就職指南」を企画するに至りました。特別寄稿としてUC Davis インターンシップ・キャリアセンターのキャリア支援担当のDr. Janice Morand（生化学分野の元研究者）にも、米国でのキャリアデザインと題するご講演のスライドをご寄稿いただきました。

今回の特集が読者の皆様がグローバルで活躍されるきっかけになることを期待しています。

### 文 献

- 1) 藤原伸介ら：生物工学，97，667 (2019).
- 2) 吉田裕美：生物工学，92，686 (2014).
- 3) 田中厚子：生物工学，93，225 (2015).
- 4) 泉 美知：生物工学，94，27 (2016).
- 5) 高野恵理子：生物工学，96，275 (2014).
- 6) 新城雅子：生物工学，90，517 (2012).
- 7) 友田慎一郎：生物工学，97，435 (2019).